

平成 22 年 5 月 17 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008 年度～2009 年度

課題番号：20720159

研究課題名（和文） 擬似初心者を対象とした英語多読指導

研究課題名（英文） English extensive reading for false beginners

研究代表者

木原 直美 (KIHARA NAOMI)

長崎外国語大学・外国語学部・講師

研究者番号：30413652

研究成果の概要（和文）：擬似初心者 21 名を対象に 1 年間定期的に多読指導を行った結果、多読は擬似初心者の授業参加へのモチベーション向上、英語読書への興味・自信、英語読書量の蓄積という点において、リメディアル教育として大きな可能性を持っていることが確認された。また、一定の条件が揃った場合、擬似初心者は多読を通して未知語の学習を行うことも可能であり、その学習成果が多読終了後に定着し得ることも確認された。しかしながら、構文理解力、語彙力が低い擬似初心者は、困難を伴わず読める多読図書の難易度が限定されており、先行研究等で提唱されている「多」読の量を確保することは難しく、多く読むことで生じるとされている多読指導による英語力向上も期待することは難しいことが明らかになった。擬似初心者を対象とした多読指導では、多く読ませるための支援が不可欠であり、特に単語増強、構文理解のサポートが別途必要であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）： This study, in which 21 false beginners participated for one year in a regular program of extensive reading, showed that extensive reading has great potential as a remedial educational tool for false beginners, in terms of increasing motivation for class participation, promoting interest and confidence in English reading, and building a foreign language reading habit. It was also found that under certain conditions, false beginners are capable of correctly guessing the meanings of unknown words that they encounter during extensive reading, and this new knowledge was retained even after the extensive reading scheme was completed. False beginners, however, who have a lower understanding of English syntax and vocabulary, were constrained to read only the most basic levels of extensive reading books. This limitation prevented false beginners from reading large volumes of English words. As a result, false beginners were at a great disadvantage in reaching the levels of reading volume that have been suggested by previous studies as critical points where readers begin experiencing the benefits of extensive reading. The study argues that when extensive reading is introduced to false beginners, it is essential that supplementary supports to enhance the understanding of English syntax and vocabulary are provided simultaneously, in order for extensive reading to become sustainable and beneficial for these learners.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育一般、リメディアル教育、英語多読

1. 研究開始当初の背景

(1) 独立行政法人・メディア教育開発センターが 2006 年度に行った英語力調査に代表されるように、日本の大学生の英語力低下が指摘され始め、英語リメディアル教育の重要性が活発に議論されるようになった。

(2) 筆者（本報告書作成者）の勤務校においても学生の英語力低下が深刻化。特に、中学校・高等学校で 6 年間英語を学習したにもかかわらず、初心者とほぼ変わらない習熟度である「擬似初心者 (false beginner の意)」が多数存在する reading の授業では、従来の一斉授業形式には限界が生じ、十分な学習成果が得られない状況であった。

(3) (2) の状況を打開するために前年度試験的に導入した英語多読指導が、擬似初心者にとって学習の動機付けとなり得ることが確認された。

2. 研究の目的

(1) 擬似初心者を対象とする多読指導において、読書量と英語力の伸びの関係を明らかにする。

(2) (1) の調査で明らかになった、擬似初心者の読書量と英語力の伸びの関係を基に、擬似初心者を対象としたリメディアル教育としての多読指導の効果を考察する

(3) 読書量が伸び悩む擬似初心者について、多読が順調に進んだ者と比較した場合に何が多読の学習障壁となっているのか、その要因について調査を行い、擬似初心者を対象とした多読指導の課題点について考察を行う。

3. 研究の方法

擬似初心者を対象とした英語 reading 授業において、多読図書（約 1,000 冊）にアクセスできる環境を整え、半年～1 年間、定期的に多読指導を行う。被験者は読書量を単語数で記録を行い、筆者は多読の進捗状況についてモニターを行い、必要に応じてカウンセリングを行う。

研究目的 (1) については、多読を開始する前に被験者の英語力の測定を行い、多読指導期間が終了した時点で再度測定したものと比較分析を行う。

研究目的 (2) については、上述の多読指導前後に測定したデータと、被験者に対して行ったアンケート・インタビュー調査結果を基に考察を行う。

研究目的 (3) については、インタビュー及びシンク・アラウド (think-aloud) 調査を被験者毎に実施し、多読における各被験者の読み方について調査・分析を行う。

4. 研究成果

(1) 擬似初心者を対象とした多読指導における読書量と英語力の伸びの関係

①英語能力試験のスコアの伸び

擬似初心者 17 名に対し、多読開始直前・直後の英語力を英検能力判定試験と TOEIC Bridge を使用して測定した。それぞれの試験スコアと読書量の関係を分析したところ、英検能力判定試験スコアと読書量の相関は 0.82、TOEIC Bridge スコア (Reading セクションのみ) と読書量の相関は 0.88 であり、この 2 つの英語能力試験スコアと読書量には高い相関関係があることが示唆された。しかし、本研究の被験者数が少なく、被験者は多読指導外でも英語の学習を行っていることから、多読における読書量が英語力に影響を与えているのか、あるいは英語力が高いことが多読の読書量に影響を与えているのか、読書量と英語力の因果関係について明らかにすることはできなかった。この点が課題として残っている。

②単語の習得

擬似初心者 4 名、lower-intermediate レベルの学習者 2 名、上級レベルの学習者 3 名を対象に、多読開始直前・直後に多読図書テキストの中から任意に抽出された 45 の英単語について和訳テストを行った。その結果、多読を通して頻度の高い単語の方が低い単語よりも習得される確率が高いことが示唆されたが、その傾向は習熟度が高い被験者に顕著であり、擬似初心者の単語習得は頻度にかかわらず成果が低いことがわかった。さらに、被験者の自己記録データを基に、多読を通して被験者が自発的に習得した未知語についても分析を行った。ほとんどの被験者が多読図書の中から自発的な未知語の学習を行っ

ており、多読における語彙習得の有効性が示唆された。しかし、学習した未知語の数、多読終了後の定着数ともに習熟度が高い被験者の方が高く、擬似初心者は多読終了時点において学習した未知語がほとんど定着していないことが明らかになった。

(2) 擬似初心者を対象とするリメディアル教育としての多読指導の効果

21人の擬似初心者を対象に1年間の多読指導を行った結果、全員が約5万2千語～約20万語の英語読書を行った。一斉授業形式を止め、個々の習熟度レベルと読書ベースに応じて読書を行う体制を整えたことで、授業に取り残される、学習意欲を喪失する、授業中に居眠り・私語をする被験者は皆無となり、全員が多読授業において主体的に英語読書に取り組んだ。アンケート・インタビュー調査においても、多読を行うことで英語読書に対する自信と興味が高まり、授業参加へのモチベーションが向上していることが確認された。

また擬似初心者レベルの習熟度であっても、挿絵や前後の文脈から十分な手掛かりを得られれば、未知語に遭遇した場合でも意味を正確に推測し得ることが確認された。頻度が高い未知語に関しては、多読終了後でも意味理解が定着し得ることが確認された。

授業参加へのモチベーション、英語読書への興味・自信、英語読書量の蓄積という点において、多読指導は擬似初心者に有効であり、リメディアル教育として大きな可能性を持っていると思われる。

しかし、多読開始直後の半年間の読書量をより習熟度が高い被験者と比較した場合、上級レベル被験者の平均が187,207語であったのに対し、擬似初心者の平均は38,175語であり、擬似初心者の読書量は限定されていた。さらに、多読を1年間継続した場合でも、擬似初心者の平均は90,579語と、上級レベル被験者の半年間の平均読書量の半分程度にしか伸びなかった。すなわち、擬似初心者は多読指導を通して英語読書を意欲的に行い、継続することが可能であることが示されたものの、先行研究で報告・奨励されている多読の量（例えば、酒井邦秀・神田みなみ編（2005）『教室で読む英語 100万語—多読授業のすすめ』では、100万語をひとつの指標として提唱している）を確保することは極めて困難であることが示唆された。

また、未知語の学習に関しても、擬似初心者は多読のプロセスの中で意味を正確に推測

することができるものの、他の習熟度の被験者と比べその学習頻度は低く、多読終了時点における未知語の学習成果の定着は極めて低いことが明らかになった。すなわち、擬似初心者を対象とした多読指導では、未知語の学習といった自主的な学習を促すことが状況によっては可能であるものの、その成果が被験者の英語力として反映されることは困難であることが示された。

(3) 擬似初心者を対象とした多読指導の課題点

シンク・アラウド (think-aloud) を実施し、各被験者の多読における読み方を調査した結果、擬似初心者の構文理解力、語彙力の低さが読書量の伸び悩みに影響していることが明らかになった。

① 構文理解力の問題

擬似初心者の中でも特に読書量が少ない（半年間の読書量が3万語以下）被験者は、多読を行う際、多読図書の英文を、構文を理解した上で読み進めるのではなく、知っている単語の意味から英文全体の意味を推測、あるいは本の挿絵を手掛かりに本のストーリー展開を推測することで読み進めていた。すなわち、構文理解力が低い被験者ほど、挿絵が多く使用構文が易しい、難易度の低い多読図書に頼らざるを得ない状況にあり、こうした難易度の低い図書は1冊の語彙数が極めて限定されていることから、時間をかけても読書量を伸ばすことは非常に困難である。

また、半年間の読書量が5万語を越えた擬似初心者の場合も、難易度が低い多読図書の場合には構文理解に問題がなく、自信を持って読書を進めているが、多読図書の難易度が高くなるにつれスピードが落ち、英文理解が困難になるため、読書量が伸び悩んでいることが確認された。特に、挿絵が少ない、あるいは全く存在しない多読図書でこの傾向が見られ、被験者はそれ以上多読図書の難易度を上げることができないために、読書のスピードが大幅に減少する、あるいは難易度の低い図書に戻らざるを得ない、といった状況に直面していた。これらの擬似初心者も多読当初は読書量を順調に伸ばすことが可能であるが、ある程度の読書量に達した後は読書量が伸び悩み、時間をかけても読書量を伸ばすことが困難である。

② 語彙力の問題

語彙力に関しても、構文理解力と同様の問題が明らかになった。語彙力が低い被験者ほど、難易度が低い多読図書に頼らざるを得ない状況にあり、その結果読書量の伸び悩みがみ

られた。挿絵が多く、使用語彙が少ない図書においては、未知語を正しく推測することも可能であるが、未知語が多く、挿絵が少なくなる図書においては意味の推測作業そのものが敬遠される傾向にあった。その結果、被験者は読書スピードが大幅に減少する、あるいは難易度の易しい図書に戻る、といった状況に直面するためにその後の読書量を伸ばすことは困難であることが確認された。

③擬似初心者特有の問題と課題

先述した(3)①と②は、擬似初心者の被験者に共通してみられた問題であるが、上級レベルの被験者には確認されなかった。擬似初心者は、挿絵のある多読図書からの脱却が困難であったが、上級レベルの被験者はむしろ、挿絵がなくなる難易度の図書を読み始める頃から急激に読書量を伸ばし、この増加がさらに英語読書への興味・自信につながっていた。この点が擬似初心者と上級レベルの被験者の大きな違いであり、擬似初心者を対象とした多読指導で留意しなければならない点であると思われる。すなわち、構文理解力、語彙力が低い擬似初心者は、困難を伴わず読める多読図書の難易度が限定されており、他の習熟度の学習者のように読書量を伸ばしていくことが困難である。そのため、先行研究等で提唱されている「多」読の量を確保することは難しく、多く読むことで生じるとされている多読指導による英語力向上も期待することは難しい。擬似初心者を対象とした多読指導では、多く読ませるための何らかの補完的な支援策が不可欠であり、そのためには先述の構文理解力((3)①)と語彙力((3)②)の問題に取り組む必要があるのではないかと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①木原直美、Extensive reading of picture books and incidental vocabulary learning: a comparison between false beginners and more advanced learners、長崎外大論叢、査読無、第13号、2009、197-208

②木原直美、How does text difficulty affect uses of reading strategies in L2 reading?: a case study、長崎外大論叢、査読無、第12号、2008、151-160

[学会発表] (計4件)

①木原直美、Extensive reading of picture books and vocabulary development in EFL

false beginners、PKETA 2009 International Conference、October 10、2009、Pukyong National University (Korea)

②木原直美、リメディアル教育としての英語多読指導: 中間報告—多読導入1年目—、第23回大学英語教育学会九州・沖縄支部支部研究大会、2009年6月20日、琉球大学

③木原直美、英語多読リーディング・ストラテジーに関するパイロット調査—多読導入期の擬似初心者に注目して—、日本リメディアル教育学会第4回全国大会、2008年8月11日、関東学院大学

④木原直美、英語多読におけるリーディング・ストラテジー—多読導入期に注目して—、第22回大学英語教育学会九州・沖縄支部支部研究大会、2008年7月5日、宮崎県立看護大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

()

研究者番号:

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: